

（注）設問で指示をした字数には句読点等も含まれます。

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

*一部改行箇所等を改めています。

生物多様性問題の背後にある、別の問題点も指摘しておきましょう。科学や技術は、今の世の中を作り上げるのに絶大な力をもっています。（1）この科学や技術が前提としている思想に問題があると私は思うのですね。

先ほど質と量という話をしましたが、科学は基本的に質を扱わないものです。量だけで考える。すると数式が使えて、きわめて客観的にみえる学問になっていきます。理科系だけではありません。経済学もそうです。すべてのものは同じ質であり、違いは多いか少ないかだけ。（I）価値を測るものさしは、ただ一本。すると、量の多い方がより豊かだ、より良いのだ、という価値観になりやすいですね。だから、より幸せにと思えば、どんどん量を増やす。そして地球の資源や生物多様性を食いつぶすことによつて量を増やしているのが現実です。量だけで価値判断するやり方を、このあたりで卒業しないと地球がもちません。これからの私たちの暮らしは、より量を減らす方向に向かわざるを得ません。

量を減らせば貧乏になってしまうと、どうしても私たちは考えがちで、だからこそ、これだけ環境問題・資源の（a）コカツが叫ばれても、量を減らせないのです。でも、（2）量の減少、即、貧乏とは、私は必ずしも思っていない。そう思う理由一。ここで、サンゴ礁のことを思い出して下さい。熱帯の貧栄養の海、つまり貧乏な海を、多様な生物にあふれた豊かな海にサンゴ礁は変えています。サンゴと褐虫藻の共生と、その間の資源のリサイクルにより、乏しい環境でも、きわめて豊かに暮らせるようになってるのがサンゴ礁。共生とリサイクルが貧しいものを豊かに変える手立てだというのは、きわめて（b）シサ的

です。もう一つの理由。「量が多い＝豊か」という今の生活が続けられなくなっても、みじめと感じなくてもよい方法があるのです。量から質へ、豊かさのとらえ方を変えればいいのです。多様だ、というのは質がいろいろあるということです。量はほどほどいいから、質の違ったものがあることが豊かなのだと、豊かさの定義を変えればいい。生物多様性を大切にするとは、多様とは豊かなこと、だから大切にするのだという発想に基づいて、生物多様性も議論されるべきだと私は思っています。

科学的発想の問題点はまだまだあります。科学は普遍性を大切にします。いつでもどこでも何にでもあてはまる法則、それが科学では重要なのです。ところが生物はA主義でご当地主義です。異なる環境ごとにそれに適応した異なる種がいます。そしてそういう種は、進化の長い歴史の産物なのであり、歴史には偶然がからんできます。だから多様な生物はそれぞれが特殊なのであって、普遍性を大切にする科学の目から見ると、そんな物は重要性が低いと思われがちなのです。

でも、かけがえないとは特殊だということです。長い歴史をもった特殊なもの、そういうものに価値があるのだという発想が、生物多様性を大切にする根底にあるべきです。これをサンゴ礁に引きつけて言えば、進化という歴史の中で、独特のものが形づくられて来たのが今、私たちが目にしているサンゴ礁の多様な生物たちなのであり、これは価値あるものとして大切にすべきです。そして、南の島には独特の文化があり、それを（c）ハグクンできたのがサンゴ礁です。生物も文化も、歴史をもつ独特のものは、それだけで価値ありとすべきです。

科学について、さらに一言。科学は、世界を単純化して眺めるものです。世界の構成要素も単純化し、要素間の関係も単純化します。科学が質を問わないのは、構成要素を単純化するためです。

（II）生態系は、質の異なる非常に多くの生物たちが相互に複雑な関係を結んでできあがっているものです。これは科学が苦手とする相手なのです。なにせ単純に量に（d）カンザンして数学的に処理することが困難です。それに、そもそも数学そのものが成り立つのかも、疑問なのです。4－1＝3という算数は、いつでも成り立つとされていますが、生態系の場合、かりに四種の生物があり、そのうち、B

ということはあり得るわけで、4－1＝0になってしまいます。サンゴと褐虫藻が一緒になると、ものすごい働きをしますから、1＋1＝10や100という答えになります。

こんなふうですから、生物多様性に関しては、数字にしっかりと裏打ちされたはつきりしたことが言えません。とくに予測に関しては、数式を使ってシミュレーションをするから予測が立てられるのであり、数式がうまく使えないと、かなりあいまいな予測しかつきません。でも、はつきりしないから何もなくてもいい、という判断を下さないようにしようではないか、というのが、こういう問題に対する態度だと思います。

(3) 科学の立場は、見るものと見られるものとの間が、きつぱりと分かれています。私という見る主体があり、見られる物という客体が別にあるのです。私という主体は、物たちの遙か上方から、いわば神様の視線で物を見て操作します。私と物との間には距離がありますから、こちらが何をやっても、やられた相手がやり返してきて、こつちが危険に(e)オチイるなんてことは考えなくていい。こういう態度に慣れてしまうと、自然に対して何をやっても自由だし安全だと考えがちになります。それが、自然から大きなしっぺ返しを受ける今のような事態を作ってしまった。

こういう、見る私と見られる物、という関係で自然とつきあうのには、別の危険もあります。私が一方的に物を見ているわけですから、結局、自分にとって関心の持てる面のみを見て、相手をこき使っていくという形に、どうしてもなりがちです。今の生物多様性の議論にしても、まさにそんな感じなんですね。人間に役立つという一方的な側面だけを集めて、今の私たちは自分の世界を作っています。でもそんな世界に住んでいると、自分自身も功利主義だけの薄っぺらな人間になり下がるおそれがあります。私にとって相手が役に立たないということは、相手が私を否定したり私に抵抗したりする側面をもっているということです。そういう側面をも含めて相手と向き合う時に、世界も私も薄っぺらではない充実したものになる。生物多様性を大事にするとは、こういう姿勢で生物たちと向き合うことだと私は思うのですね。

サンゴ礁の海に潜ると、たくさん目の私を見ているような気がします。事実、魚たちは見ているんです。彼らの縄張りに入り込んだら、つついて追い出しにくる魚もいます。こういう経験を持つと、自然に対して、そうそう自分勝手なふるまいはできないあと、思えてくるものです。これはじつにかけがえのない経験であり、そういう貴重な経験を与えてくれる場として、サンゴ礁をはじめ、自然を大切にしなければいけないと私は思っています。

(本川達雄『生物学的文明論』新潮新書)

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナを漢字で書きなさい。

- | | | | | |
|---------|--------|-----------|----------|---------|
| (a) コカツ | (b) シサ | (c) ハグクンで | (d) カンザン | (e) オチイ |
|---------|--------|-----------|----------|---------|

問二 Aに最も適する語を次より選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|------|------|
| ア、排他 | イ、個別 | ウ、主観 | エ、客観 | オ、集団 |
|------|------|------|------|------|

問三 () I、IIに最も適する語を次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|--------|-------|--------|--------|--------|
| (I) | ア、ただし | イ、やはり | ウ、もちろん | エ、つまり |
| (II) | ア、しかも | イ、たとえば | ウ、ところが | エ、ちょうど |

問四 傍線部(1)「この科学や技術が前提としている思想に問題がある」とありますが、「科学が前提としている思想」について、筆者は三点挙げています。文中の言葉を用いて、それぞれ十字程度で簡潔に答えなさい。

問五 傍線部(2)「量の減少、即、貧乏とは、私は必ずしも思っていないません」とありますが、それはなぜですか。筆者の考えを二点、文中の言葉を用いて簡潔に答えなさい。

問六 Bに入れるべき内容を、前後の文脈から考えて簡潔に答えなさい。

問七 傍線部(3)「科学の立場は、見るものと見られるものとの間が、きつぱりと分かれています。私という見る主体があり、見られる物という客体が別にあるのです。私という主体は、物たちの遙か上方から、いわば神様の視線で物を見て操作します」とありますが、筆者はこのことからのような危険が生じると述べていますか。二点、文中のことはを用いて簡潔に答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、この小説の冒頭で作者は「私はその人を常に先生と呼んでいた」と紹介しています。

＊一部改行箇所等を改めています。

「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。「こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問して置きながら、すぐ他の説明を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。「聞いた事は聞いたけれども」兄は必竟聞いても解らないと云うのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に理解して貰う必要はなかった。けれども腹は立った。又例の兄らしいところが出て来たと思っ

った。先生々と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は考えていた。少なくとも大学の教授位だろうと（a）スイサツしていた。名もない人、何もしていない人、それが何処に価値を有っているだろう。兄の腹はこの点に於て、父と全く同じものであった。けれども父が何も出来ないから遊んでいるのだと速断するのに引きかえて、兄は何か遣れる能力があるのに、ぶらぶらしているのはつまらん人間に限ると云った風の①口吻を洩らした。

「イゴイストは不可いね。何もしないで生きていようというのは（b）オウチャクな了簡だからね。人は自分の有っている才能を出来るだけ働らかせなくっちゃ嘘だ」

私は兄に向つて、自分の使っているイゴイストという言葉の意味が能く解るかと聞き返して遣りたかった。

「それでもその人の御蔭で地位が出来ればまあ結構だ。御父さんも喜こんでるようじゃないか」

兄は後からこんな事を云った。先生から明瞭な手紙の来ない以上、（1）私はそう信ずる事も出来ず、またそう口に出す勇氣もなかった。それを母の（c）早呑込でみんなにそう②吹聴してしまった今となって見ると、私は急にそれを打ち消す訳に行かなくなった。私は母に（d）サイソクされるまでもなく、先生の手紙を待ち受けた。そうしてその手紙に、どうかみんなの考えているような衣食の口の事が書いてあれば可いかと念じた。私は死に瀕している父の手前、その父に幾分でも安心させて遣りたいと祈りつつある母の手前、働らかなければ人間でないように兄の手前、その他妹の夫だの伯父だの叔母だのの手前、（2）私のちつとも頓着していない事に、神経を悩まさなければならなかった。

父が変な黄色いものを嘔いた時、私はかつて先生と奥さんから聞かされた危険を思い出した。「ああして長く寐ているんだから胃も悪くなる筈だね」と云った母の顔を見て、（3）何も知らないその人の前に涙ぐんだ。

兄と私が茶の間で落ち合った時、兄は「聞いたか」と云った。それは医者が帰り際に兄に向つて云った事を聞いたかという意味であった。私には③説明を待たないでもその意味が能く解っていた。

「御前此所へ帰つて来て、宅の事を監理する気はないか」と兄が私を顧みた。私は何とも答えなかった。

「御母さん一人じゃ、どうする事も出来ないだろう」と兄が又云った。兄は私を土の臭を嗅いで（e）朽ちて行っても惜しくないように見ていた。

「本を読むだけなら、田舎でも充分出来るし、それに働らく必要もなくなるし、丁度好いだろう」

「兄さんが帰つて来るのが順ですね」と私が云った。

「おれにそんな事が出来るものか」と兄は一口に斥けた。兄の腹の中には、世の中でこれから仕事をしようという気が充ち満ちていた。

「御前が厭なら、まあ伯父さんにでも世話を頼むんだが、それにしても御母さんは何方かで引き取らなくっちゃなるまい」

「御母さんが此所を動かか動かないかが既に大きな疑問ですよ」

兄弟はまだ父の死なない前から、父の死んだ後に就いて、こんな風に語り合った。

（夏目漱石『こころ』新潮文庫）

注 「イゴイスト」・・・エゴイスト（利己主義者）のこと。

問一 傍線部（a）（e）のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みをひらがなで書きなさい。

（a）スイサツ

（b）オウチャク

（c）早呑込

（d）サイソク

（e）朽ちて

問二 二重傍線部①・②・③の意味として、適するものを次より選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ①口吻を洩らす (ア、高ぶった調子で批判する イ、それとなく意思、感情を口に出す ウ、独り言のように言う)
②吹聴する (ア、人に言いふらす イ、自慢げに言う ウ、あることないことを平気で言う)
③説明を待たない (ア、説明するいとまがない イ、説明を繰り返さない ウ、説明を必要としない)

問三 傍線部(1) 「私はそう信ずる事も出来ず、またそう口に出す勇氣もなかった」とありますが、「そう」の指す内容について、簡潔に答えなさい。

問四 傍線部(2) 「私のちつとも頓着していない事」とありますが、その具体的な内容を表した語句を文中から抜き出さない。

問五 傍線部(3) 「何も知らないその人」とありますが、「その人」とは誰のことですか。また、何について「何も知らない」のですか。簡潔に答えなさい。

問六 本文には、「先生観」について、父と兄の「共通した見方」と「違った見方」が語られています。それぞれの内容について、文中から読み取って簡潔に答えなさい。

問七 次の選択肢の中から、夏目漱石に関わりの深いものを二つ選んで記号で答えなさい。

- ア、写実主義 イ、浪漫主義 ウ、反自然主義 エ、転向文学 オ、高瀬舟 カ、夜明け前 キ、草枕 ク、浮雲